

3552 地球のかおり「飛翔」(産経新聞)：状況と心模様

単なる運が良かっただけではすまされない。ラッキー、スマイル オン ミー。
フィンランド、氷が融け始めた湖水。夫唱婦随、微笑ましい。
最初は、おだやかな光景だった。長い冬の間、どこにいたのだろう。
いつ、ここに戻ってきたのだろう。
いつまで、ここにいるのだろう。スカンジナビア半島の最先端、
ノールカップ岬を探訪した帰りだった。大きな仕事を済ませた後だった。
途中、羊との出会いはあったものの、生き物との出会いは久しぶり。
何気なく興味を持って腰をおろし、休憩していた。

大きな湖水の大半は凍っていた。おそらく厚い氷なのだろうが、覆^{おお}われていた。
日当たりが良かったのか、眼前の一角だけが、とけはじめていた。
そういえば、北欧の春が到来してきている頃、その次節かもしれない。
日差しに少し温かさを感じた。

このカップル、気持ち良さそうに、仲良くスイスイと泳いでいた。
水面下では、足を動かしているのだろうが、その気配を感じさせないほどスムーズに…
音もしない実に静かな光景。視界は広大。
白鳥の左右の波跡の軌跡で、スピードが判断できる。動物の感覚は鋭い。
人間様の存在には気づいているだろう。にもかかわらず、警戒もせず悠然と。

かなり近くまで接近してくれた。気配が危険と感じなかったのだろう。
私は動くわけでもなく、何するわけでもなく、ただ記録に一枚、泳ぐ様を観察というか、
時を楽しんでいた。周囲は、し～ん としている。何の音もしない。静寂そのもの。
突然、遠方から一声ならぬ、一鳴き、その途端、眼前の光景が展開された。
神がかりの一期一会。雄だろう。グア、グア、グア、と 大きな鳴き声で飛び出した。
威嚇の声のように、私には聞こえた。

最初、肉眼では判別できなかったが、仲間の鳥のようだ。

歓迎の鳴き声ではない。威嚇の鳴き方。そう思ったのは、そのあとの経緯がある。

別のカップルが着水。警戒というか対峙する気配。一定の距離をあけて、にらみ合いをしている。どちらも視線を外さないように見えた。緊張感？ 雰囲気伝わってくる。

その後、どれだけの時間が経ったのか、ついに、最初の距離は縮まらず、

やがて、別のカップルは、根負けしたように、立ち去っていった。縄張りがあるのかもしれない。

餌場^{えき}というか、生存競争？ あれこれ考えるが、結論に到達しない。

雄の白鳥の肩から、力が抜けたように感じた。

そして、元の静かな時間に戻った。

ふと、この鳥は、オスだろうか、メスだろうか。

人間社会と違うのだろうか。

ライオンは、メスが狩りをする。

眼前の光景、相方は悠然としている・・・

この後もいろいろ記録でもあり、書いているがこの辺で。

状況と心模様は、あとでわかるように、こんな要領で下書きを書いているので、整理が中途半端。

反省することが多いが厚かましく。暑さの汗でなく、今もって、文章には冷や汗・・・

新聞掲載となると、タイトルも文章も、制限内で書かないとならない。

毎週掲載、7年間も長きにわたって掲載させていただいた。今は、いい思い出、心の財産。

自由に。思いつくままに。ホームページ上での乱文ご容赦。